

相沢 暁村(あいざわ・ぎょうそん)

1、プロフィール

学生時代、仙台の奥羽百文会に入り、若尾瀾水・大須賀乙字を知る。上北郡田沢村医の時、「三千里」旅行の碧梧桐の来訪を縁に野辺地俳人と交わる。東北各地に医療・俳句の行跡を残す。

<生没>

1880(明治 13)年2月 17 日～1968(昭和 43)年8月 28 日

<代表作>

『句集さるびや』

『句集業草』

『句集道草』

『自句自解暁村百句』

<青森県との関わり>

明治 30 年代に上北郡沢田村の村医となり、また法奥沢村にも在任する。俳誌を刊行し、地方新聞に句、文を残す。

2、作家解説

明治 13 年、岩手県折壁村生まれ。本名寧。30 年紅緑・泥牛ら創始の奥羽百文会の、若尾瀾水主宰時代に大須賀乙字の入会説得。互に二高の学生。苦学勤勉の人故に俳が伸びぬと瀾水は評した。当時の句「花散りて毛桃小さき霧の色暁村」。

38 年、仙台医専卒業。青森県沢田村々医、次いで岩手県浄法寺、郷里、青森県法奥沢と転勤。

39 年「三千里」旅行の碧梧桐は乙字の実家、登米の桜碓子を歴訪、沢田に数泊。

「客人を吹雪く後架へ灯かな暁村」「君去りて湯婆冷めたり徒らに暁村」後沢田には乙字も訪れ山梔子宛書簡で奥入瀬・十和田での暁村句を絶賛した。

「河鹿鳴くまでを水鶏に涼うす暁村」「涼しさの案内の水も極まりぬ暁村」。同時に「遠く夕立って来る森音を聞いたり乙字」は暁村を感嘆させた。沢田村時代碧梧桐の縁で野辺地人と親しみ、主宰の白雨会俳誌「たかしほ」を中村泰山に送って原稿を依頼した。野辺地開業の話まで出た。41 年末移転した浄法寺では、歌人小田島孤舟と文学誌「曠野」を出し、青森県歌人和田山蘭・同俳人中村泰山・山口漁壮・松本星陵らの作が載った。大正 13 年鉄道医となる。

昭和 7 年新津鉄道官舎で、「降り多ければ夜雨も聴くなり老の秋暁村」。18 年鉄道医を退き郷里で開業。気仙沼湾を詠む。「東風一ト日船の汽笛を聞いて雨暁村」「東風荒れにして正月泊り伸す日かな暁村」「山焼を見来し庭静かな鶏の声暁村」「山焼の謎もふりたり鍋の尻暁村」。

沢田・奥瀬での句(補)

「小酒盛酔も一樹の花のため暁村」「石高路にませ垣影す蒲公英暁村」「かくり沼見し人もなき夏野かな暁村」「胡桃若木の葉を読む秋の空となれり暁村」。

昭和 42 年刊『若尾瀾水俳論集』の序を書く。昭和 43 年 8 月 28 日没す。88 歳。
闇をぬく 秀つ峯見えて 虫高音暁村 (句碑 室根山)